

何故、九州の小都市の名を覚えているか、と言うと、一つは昭和二十七、八に年に西日本の大風水害があつて、諫早川辺の中学校が濁流とともに流された。その復旧をどうするか、という問題があつたからである。

災害復旧は、当時も原形復旧が原則であつた。今だって、公共事業の関係者はそれが大原則だと言つて憚らない人が少なくない。復旧だから、もとの通りにするのが大原則である。従つて、火事や天災にあつて壊れた小中学校の災害復旧は、木造であつたものは、木造で建て直すのが原則であつたのである。実際建てる時は鉄筋コンクリートの校舎にしても一向差支へはないが、国の補助としては、原則の木造での復旧となつていた。

今でもよく覚えていいる。当時の諫早市長の野村儀平氏が又災害で壊れるといけないから鉄筋コンクリート造での復旧補助にして欲しく、当時文部担当の主査の私に日参しかねまじき陳情を繰り返していた。

始めは厳に反対していた私も、彼の熱意に負けて、やはり鉄筋で建て替へることを認めるのが妥当ではないか、というように考え直して、結局、全国で初めての例として認めることにしたのである。

もつとも、その頃、北陸は富山県魚津の小学校がフェーン現象もあつて火事で焼けた時は、例外として、鉄筋コンクリートでの建築を認めることにした。その例を思い出したのである。

後年、再び諫早を訪ねる折があつて、例の中学校を見に行つたが、場所が變つてはいたが、鉄筋の校舎として立派に建つていて、何となく懐かしい気がしてならなかつた。

雨来私は、復旧という言葉には正に旧に復するから復旧であるにしても、違つた形での復旧を認めてもよいのではないか、と思うようになったし、制度をそのように改めるべきではないかと思うようになった。

後年、同じ長崎県で風水害あつた時に高田知事と復旧工事の現場を視察した時、やはり、その思いを強くした、少なくとも、原形復旧にベラボーに高い費用を払うくらいなら、その金額の範囲内でもっと安全な場所に施設を作つた方が、何ぼ合理的かわからない、という議論を交したことを思い出してならない。

昔から、こういう公共災害復旧事業を取りあつてきている人こそ、原則を變更するのを嫌がるようであるが、そこは、よく考え直して貰わなければならないと思つている。

復旧する施設を前よりも良くすることを、いわゆる焼け太りなどとして反対しないで、災害復旧の復旧という言葉にとらわれないで、より合理的な災害対策を考えすべきではないか、と固く思うようになっていいる。